

修学旅行の事前学習として、いのちや平和への願いを込めた「宣言」や合唱を準備し、折り鶴を折って見学にのぞむ学校もあります。



未来へと

第五福竜丸の航海をつなげたい

昨年は花をつけなかった展示館横の紫陽花が今年には咲きました。梅雨の晴れ間の夏を思わせる日差しに誘われるように、生徒たちのにぎやかな声が響きます。

修学旅行のピークの五月六日には、一三〇校余りの小中高校と大学のゼミなどの見学があり、ボランティアガイドの皆さんも大活躍です。

良い季節の到来に高齢者をはじめ六〇を超える市民グループにも説明しました。

修学旅行で訪れた生徒から送られてきた感想文を紹介します。

——今の時代は核エネルギーを使っていますが、地震や津波などの災害があれば生活に害が及びます。人は昔と同じ過ちを犯していると思います。だから、過去に在った出来事をこれから生かして良い方向に進めなくてはいいかなということがよくわかりました。震災後の福島の現実が

ある今だからこそ、六〇年前の福竜丸に起こった悲惨な出来事を伝え続けていくことに大きな意味があると思います。東北にいる自分たちが核の恐ろしさをよく知っているので、このことを後世に伝えていこうと思います（岩手県九戸郡軽米中学・男子）——

展示館の見学をとおしてしっかりと核の問題と現実とを重ねて考えている様子が伝わります。

船を指さし説明をしながら、保存の取り組みをすすめ、展示館の実現に尽力された方々の願いに想いを馳せませぬ。ぬかるみのゴミに足を取られながら船体に通い、守った人びとの熱意：地元江東で保存運動の「三羽ガラス」と呼ばれた方がたも鬼籍に入られました（7めに記事）。被ばくから五九年、未来へと第五福竜丸の航海を多くのみなさんと推し進めたいとねがいます。

一本の万年筆

藤原 弘



手もとに一本の万年筆がある。パソコンのせいもあって最近のはめつきり出番が減っているが、時おりインクを詰めかえたり手紙を書いたりするときに手にすると、色々な思いが去来する。

三十数年も前の昔話になるが、その頃小さな出版社を営んでいたわたしは、なんとか三宅泰雄先生に本を書いて欲

しいと思いつめていた。それまでお会いしたことはなかったが、名著『空気の発見』の著者であり、「たたかう科学者」として、さらに第五福竜丸平和協会の会長である高名な先生に憧れに似た気持ちを持っていたのである。

その頃、日本科学者会議の機関紙『日本の科学者』の編集・発売をわたしの会社で引き受けることになり、同会議の代表委員であった三宅先生をご挨拶のため訪問することになった。

緊張しながら電話すると、「あ、いつでもいらっしゃい」と気さくなお返事。早速先生の研究室（仕事場）に出かけた。研究室は高円寺、気象研究所に近いマンションの一室にあった。同じマンションの別棟奥には先生の愛弟子であり生涯の共同研究者でもあった猿橋勝子さんが住んで居られ、その後も私の訪問時よく同席されていた。

先生は猿橋さんの紹介時、いたずらっぽい表情で「この猿橋さんはねえ」といろいろなエピソードを話してくださいました。

「猿橋さんは単身アメリカに乗り込んで対外試合をやりに、勝つて来たんだよ。なにしろ名前が勝つちゃんだからねえ」。

このエピソードは第五福竜丸の関係者などにとってはあまりにも有名だが、蛇足を承知で簡単に紹介しておく、「一九五四年、ビキニ環礁で行われたアメリカの水爆実験による海水汚染データは、日本の科学者により分析された。やがて気象研が一括して海水の放射性物質の測定にあたり、三宅博士のもと猿橋さんも分析にあたった。その結果は海洋汚染濃度がアメリカ側発表の数倍から数十倍であることが判明した。核開発を進めていたアメリカは猛反発した。」

数年後、三宅博士の提唱で、猿橋博士は海洋の放射能測定法の相互検定のためカリフォルニアのスクリップス研究所に乗り込み、現地の研究者と分析競争を行った結果、みごとに勝利した」というものがある。

この話を披露されるとき、三宅先生はほんとうに嬉しうだった。

私は先生に「科学論を一冊にまとめていただけませんか」とおねがいました。「考えておくから時どき遊びにいらっしゃい」というお返事に甘えてそれからちよくちよく邪魔した。たまたま猿橋さんがわたしの妻の先輩だったこともあり、うかがう度に話はずんだ。

当初、「一冊でも」とお願いした著書は一九七八年の『科学について』に始まり、第二巻『原子力を考える』、第三巻『ただ一つの地球』、第四巻『随筆思索と旅』と続刊し、『三宅泰雄科学論集』全四巻として完成した。

このほかに先生のエッセイをアトランダムに編んだものとして『研究室の窓から』がある。この本は最後の最後までタイトルが決まらず、その日も「じゃ、このつぎにまた仕切り直しをしようか」との先生の言葉で帰途についてのだが、ふと先生がものを考えられるとき、研究室の窓から遠くを眺める目が頭に浮かんだ。早速高円寺駅の公衆電話から「先生、研究室の窓からはどうでしょう」と提案した

ところ、先生は「うん、それ良いね」と即決された。本のタイトルが決まるときはえてしてこんなものである。

ふだんは温厚そのものの先生だったが、話題が原水爆、第五福竜丸などに及ぶとじつとわたしの目を見つめ、手術後の不自由な声をふりしほるようにされながら、テコでも動かぬ信念を吐露された。とくに原水爆禁止運動の統一には心を砕いて居られ、誤解や偏見には一歩もたじろがない姿勢で立ち向かわれていたように思う。

わたしが協会の評議員をお引き受けしたのも「君の目で見てもその意見を率直に会議の時や直接わたしに伝えてほしい」という先生の熱心な説得にほだされたことだった。

ある日先生愛用の万年筆を「これ持って行きなさい」とさり気なくくださった。

先生や猿橋さんがご存命だったら東日本大震災や今日の原発問題についてどんなご意見が聞けたらだろうか、と万年筆を手にとりながら改めて考える。（ふじわら ひろむ／第五福竜丸平和協会顧問）



ラツキー・ドラゴン・クインテットの演奏によせて

崔^{ナエ} 善愛^{ソツエ}

林光さん、そして新藤兼人監督が他界されてもう一年が経ちましたが、林さんの曲をよくピアノで弾いているからでしょうか、今もそばにいるような気がしています。

林光さん（1931〜2012）は、クラシック界では稀有な作曲家でした。通常、作曲家の世界は演奏家でさえ近づきがたいものがあります。ペー

トーベンやショパンの曲を演奏するときは、作曲家の思想やその時代を想像して音を探ります。私にとって作曲家は空想の中の人、目の前に現れることはないのです。ですから初めて林光さんの曲をご本人の前で演奏したときは、緊張しました。「君、そうじゃないよ」と言われるんじゃないかと畏れたのです。けれども林さんは、「うん、そんな感じがいいですよ、そこはもうちょっとテンポ速くてもいいけど、でも、そのやり方もありだとも思うし…」と、作曲家の考えが絶対ではなく、演奏者の感性を尊重し、むしろ演奏者からどんなものが引き出されるのかを林さんはたのしんでいる、といつも感じました。「大家」とよばれる人にはよく威圧感がありますが、林光さんはきつと、そうなりたくない、と思っておられたのでしょうか。そして自ら舞台に立ち、「しろうとっぽく」歌い、ピアノを弾く

のです。高度な技術で人を圧倒するような演奏家にずっと囲まれていた私は、緊張と気負いのようなものがやわらぐのを感じました。

さて七年前の二〇〇六年、第五福竜丸展示館三〇周年の年に初演された「ラツキー・ドラゴン・クインテット」のコンサート、きつとそのときの感動を覚えておられる方も多いのではないのでしょうか。二〇〇九年には三部が加わった完結版でコンサートが開かれ、その様子を伝える「福竜丸だより」には、林光さんの言葉がこう記されています。

数年前の記念コンサートでは映画「第五福竜丸」（新藤兼人監督）の音楽を再構築した「ラツキー・ドラゴン・クインテット」を初演した。曲は、映画の冒頭の音楽による「出航」と、廃船となって東京へ曳航される場面による「曳航」の二部からなっていたが、コンサートを發想、索引した学芸員の皆さんの熱意にうごかされて、第三部をこのたび作曲。それは「調和の海へ」と題され、核兵器ばかりではなく、自然との調和を損なう「文明」が廃絶されてよ

みがえった地球の海を航海する第五福竜丸を夢見る、幻想的な終楽章である。ちなみに「調和の海」は、同業の畏友間宮芳生の弦楽四重奏曲のタイトルからとられている。

この曲が生み出されるかげに、音楽を愛し、作曲家に創作をうながした、大胆な（？）学芸員の方の力があつたこと、あらためてここから拍手を送ります。

そしてコンサート当日、林さんは「この曲によつて私たちの「希望」がずっと保たれるように心から願っている」と語っておられます。

林さんのいう「希望」とは、一九六一年東ドイツから西ドイツに亡命したエルンスト・ブロッホの次の言葉を受けたものでした。

希望は裏切られる。何度でも。裏切られることによつて、希望は確かなものになっていく。わたしたちは、裏切られ、試され、そのたびに根拠づけられたものとなる「希望」に鼓舞され、道を示され、ひと所に安住することなく、そのたびに限界を踏み越えて行く。」・ブロッホの

言う「希望」、ほくたちはそれを「核廃絶」というこの時代の「希望」に読みかえることができる。（「光・通信」の64）より抜粋）

幾度となく裏切られながら、より強くされてゆく「希望」、林光さん、そして「第五福竜丸」に携わるすべての人の想いを胸に演奏したいと思います。（ピアノリスト）

コンサート

「自由な風の歌」第8回

8月4日（日）13時30分開場
14時開演、四谷区民ホール（四谷区民センター9階）

林光作曲「ラツキー・ドラゴン・クインテット」「森は生きている」「十二月の歌」ほか

崔善愛（ピアノ）／三宅進（チェロ）／飯村孝夫（バリトン）／戸島さや野（ヴァイオリン）／竹原奈津（ヴァイオリン）／大島亮（ビオラ）
～自由な風の歌合唱団

チケット…2000円

（当日2500円）

中学生以下1000円

大石さんと 出会って

坪香理子

私が大石さんと出会ったのは、私が大学生の時でした。もう二〇年近くになります。奈良県の中学校の教師をしていた母が、修学旅行で東京に行くことになりました。その当時、東京の大学にいた私は、母に外国人英語指導助手のアメリカ人の通訳をするように頼まれました。修学旅行の行き先の一つが、第五福竜丸展示館でした。一緒に行くことになって初めて大石さんの本を手に取りました。水爆実験について、第五福竜丸についてほとんど知識のなかった私は、むさぼるように何回も読み、強い衝撃を受けたことを今でも覚えています。

展示館にて大石さんにお話を聞かせていただいたのは、第五福竜丸の甲板でした。大石さんのお話を聞かせていただき英語に訳していく中で、アメリカ人も驚きを隠せない様子でした。甲板で、力強く淡々と語ってくれた大石さんの姿が私の目に焼き付いています。

その後、大石さんのお宅のクリーニング店にもお邪魔してお話をしました。穏やかで、あたたかい大石さんの人柄にふれることができました。以来ずつと年賀状を通じての交流が続いています。毎年年賀状が届くたびに、お元氣そうだと安心していました。しかし、今年はその大切な年賀状が届きませんでした。私は今年中学三年生を担当し、修



学旅行で第五福竜丸展示館にお邪魔することになっていました。是非大石さんのお話を私の生徒にも聞かせたいと思っていたのですが、なかなか連絡が取れず心配していました。修学旅行で第五福竜丸展示館にお邪魔して、連絡が取れなかった理由がわかりました。大石さんも非常に気にされていたことなどを聞かせてもらいました。

約二〇年ぶりに訪れた第五福竜丸展示館は、昔と変わらぬ船が力強くありました。一方で、この展示館に母と同じ立場でお邪魔できたことに月日の経過を感じました。また、今は亡き母が導いてくれたものではないかと胸にこみ上げるものがありました。母が大学生であった私に伝えようと大石さんに会う機会を作ってくれたように、私も今目の前にいる生徒たちが自分の周りにいる人々、そして次の世代に伝えていかなければならないと強く感じています。体調を崩されてなお、精力的に講演されていることを、生徒にも伝えていきたいと思えます。日本人として、日本に住む者

として知っておかなければならない事実だと思っております。大石さんのことをずっと心配しています。(つばかみちこ／三重県伊賀市立霊峰中学校教諭)

大石又七さん 中学生への 講話再開中です！

今年三月号でもお知らせしましたが、大石又七さんが、リハビリを続けながら講話を再開されています。体調が万全ではないため、展示館学芸員が同行し、概要を学芸員が解説し、大石さんに質問しながらお話いただくというスタイルでの講話です。

時には声がかすれ、聞き取りづらいこともありますが、中学生たちからは、たくさん質問が出ます。「死の灰をあげたとき、怖くありませんでしたか?」「原発についてどう思いますか?」「いま、ぼくたちに一番してほしいことはなんですか?」

大石さんは、「わたしたち



は放射能についても核兵器についても知識がありませんでした。だから不安に感じるのとさえできませんでした。放射能は容赦しません。みなさんひとりひとりの問題として、真剣に勉強してください。一生懸命に生きてください。勉強するということは、そういうことだと思えます」と、中学生に繰り返し語りかけました。また同行する学芸員にも「どうして自分が被害をうけたわけでもないのに、一生懸命なのですか?」といった質問もあり、伝えること語りつぐことの大切さを話しています。修学旅行を手配する旅行社の添乗員さんからも「世代と時代を埋める役割を、当事者ではない私たち全員がとりくまなくてはなりませんね」と声をかけていただきました。

一九九一年一〇月二四日付で公開された外務省外交文書「第五福竜丸その他原爆被災事件関係一件」は約三四〇〇頁に及ぶもので、事件の顛末からアメリカへの申し入れ、補償要求、諸外国の対応、政府への陳情書・意見書など多岐にわたる資料です。当時、どのように被害額が算定されたか、アメリカとの交渉経緯があったか、また乗組員の治療をめぐってのやり取り、「危険区域」をどうとらえるかなど、事件の背景を知ろうと重要な資料でもあり、公開以来、国際関係の研究者などが分析してきました。

ビキニ水爆実験被災五〇年にあたる二〇〇四年、未公開分約二五〇〇ページを読売新聞静岡支局が、情報公開請求で入手し、協会に寄贈されました(以下「新入手文書」)。新入手文書には、既に公開されていた「原爆被害対策に関する研究連絡協議会」の

資料紹介② 外交文書

文書にはなかった要綱案や予算案、各国からの医薬品等寄贈に関する文書、輸出用のマグロの放射能検査に関する文書が含まれています。また大臣の国会答弁用に準備された「想定問答」資料、一九五五年の日米交換公文手交後に、水産業界から出された意見書や公開質問書など、これまでに知られていない文書もあります。

また、五四年の一月に行われた日米科学者による「放射性物質の影響と利用に関する会議」開催の前提となる、日本学術会議の意向を示す文書なども含まれており、前回紹介の厚生省資料と併せて、放射能汚染調査打ち切りの背景など、今後の解明に不可欠な資料です。

全国の港で検査された第五福竜丸以外の被災船のデータなど、協会でもさらに分析を重ねていきます。(学芸員)

展示館日誌



5月3日 フィリピンからマラヤ・ファブロスさんが来館。今日から三日間、展示館ボランティアさんの家にホームステイした後、三か月かけて東京から広島まで歩く！

5月10日 テレビ収録でジャーナリストの鳥越俊太郎さんと大石又七さんが来館され対談(写真) *8月11日 テレビ朝日系「ザ・スクープスペシャル」で放送。

5月16日 修学旅行ラッシュデビュー。山梨の小学校、北海道・山形・三重・和歌山・岐阜・兵庫の中学校、都内の保育園、横浜・千葉の散歩サークルなど一団体が来館！

5月17日 横浜の中学生が広島修学旅行の事前学習遠足

で来館。六月には大石さんが学校へお話に行く。ボランティアからお話をきいたあと合唱「若い翼」をプレゼントしてくれた。

5月19日 小学生を連れた父親の解説が、実に過不足なく正確で、静かな館内に響いている。その声を聴いていたのか、五〇代の六人連れが放射能のこと、広島・長崎のことを閲覧コーナーで長時間お話を聞いていく。そばにいた女性が、広島・長崎の写真集を見せながら、お孫さんの質問に答え

ていた。

6月5日 前任校でも大石さんにお話ししてもらったという教員の熱意が実り、大石さんと学芸員が講話。その後展示館を見学し、平和宣言を読み上げたあと、合唱「翼をください」を船体に捧げ、折鶴を贈ってくれた。

6月10日 開館記念日。休館日のため展示館の庭に咲く広島市の花キョウチクトウと長崎市の花アジサイの写真

をフェイスブックにアップ。6月23日 晴れた日曜日。中学校の陸上競技会、剣道の

昇段試験などで夢の島公園全体が中高生の姿であふれていました。剣道部男子が「うっわ！やつべー！なつかしー」と小さく叫んで手にとったのは絵本「わすれないうで」(赤坂三好 文・絵)。小学校の図書室で読んだという。第五福竜丸展示館の看板をみかけて、「すいこまりのように」ここにたどりついたらと、ちょっと照れながら話してくれた。

娘ふたりと手をつないで入ってきた若いお父さん。「うわあ、パパ、ちいさいときに ここに来たんだよ」と絶叫。まもなくオチビさんたちは飽きてしまっただけで、パパは名残惜しそうに「おおきくなったらまた来ようね。パパといっしょに来るんだよ」と、何度も振り返りながら帰って行った。幼い頃は「おおきな船をみた」という記憶しかのこらないかもしれない。でも、こうやって、つながっている、記憶がよみがえって誰かに伝えたいから、そんな存在でいられば、と感じた一日。

連載②

晴れた日に
雨の日に

—第五福竜丸とともに—

山村茂雄

た。白い花々に囲まれた服部学さんの笑顔に話しかけるように多くの人が追慕の想いを語りました。服部さんの誕生日は一九二六年の二月二九日、この日より前の一月一二日生まれの吉田嘉清さんのあいさつは心打つものでした。友情を語りつくなかに深い悲しみを包みこんでいるように聞こえました。二人は誰もが知る原水爆禁止運動の同志でした。

*

私が服部さんと仕事をするようになった最初は、五八年の第四回原水爆禁止世界大会討議資料の分冊『死の灰の谷間日本』の制作を担当したと

「彼は常々『科学者の社会的責任』という言葉をお口にしておりました。『科学者が核兵器を作ってしまった。科学者がトイレのないマンション（原発）を作ってしまった。だから科学者はそれらを無くす責任を負っている』と。この言葉を夫の形見として、私も残された人生を生きていこうと思っています。」

この文章は、昨二〇一二年一月一〇日に亡くなられた服部学さんの「お別れの会」の参列者や用問された方に届けられたお礼状に、服部翠さんが記されていたものです。

「お別れの会」は一二日夕刻と一三日の午前、横須賀の小高い丘の葬苑で行われまし

このパンフの第一章は放射能害、第二章は原爆被害の実相を内容としましたが「放射能」や「死の灰」をわかり易く解説したものにするために子どもを守る会のお母さんたちの質問を受けて第一稿を作ることにしたのです。福島要一さん（日本学術会議・科学史）が世田谷のお母さんたちに声をかけてくれました。応答はどなたが、すかさず福島さんがこう言われました。「服部君が来ると

平和行進の出発。左から二人目が服部さん



伝えてありますよ。服部君と聞いてお母さんたちはそわそわしています。」三二歳の立教大

学助教授。誰にも好かれる原水爆禁止運動のスター講師の一人でした。草野信男さんは、久保山愛吉さんの病状や死因、広島・長崎の原爆被害について話しました。一章の原稿は川崎昭一郎さんが専門的な用語などの整理と構成にあたり、私がリライトしました。原爆被害の実相は広島・長崎からの原稿を編集部が整理し、全体を草野さんが監修しました。思えば私が川崎さんと一緒に仕事をしたこの時がはじめてかもしれません。

*

服部学さんとビキニ事件、第

五福竜丸保存運動、第五福竜丸平和協会役員としての活動については、川崎昭一郎さん（協会代表理事）が『福竜丸だより』の追悼文（二二年三月号）に書かれています。それには同じ物理分野の先輩である服部さんとともにした運動への参加も紹介されていました。

その一つ、七七年「NGO被爆問題国際シンポジウム」ではともに日本準備委員会の事務局代表、川崎さんは事務局長、服部さんは会計責任者でした。事務局代表には田沼肇、伊東壮、庄野直美さんなども加わり、それぞれ専門分野の総括報告者として運営と準備、作業文書の作成にも当たりました。服部さんに限って記せば、作業文書Vの補遺文書「ビキニ核兵器実験とその影響」を執筆しています。すべて第五福竜丸保存委員会、平和協会にかかわる方々でした。あわせて記せばシンポジウム公式招待状の日本側署名者は三宅泰雄さんが務められています。

*

被爆問題シンポジウムの開催とその成果は大きなもので

した。国際的な運動の流れからすれば、七八年の国連軍縮特別総会とのかかわりにおいても重要なものでした。国内的にも、国際非政府諸組織（NGO）と国内NGOの運動と世論を結んで、原水爆禁止世界大会が一四年ぶりに統一して開かれるのです。

シンポジウムの成果を報告する大衆集會が、統一世界大会の日程を繋ぐようにして広島と長崎で開かれました。

シンポジウム宣言「生かす却か」は、ヒロシマ・ナガサキのヒバクシャから全世界のヒバクシャにうったえる——と副題されました。宣言は「私たちはみんなヒロシマ・ナガサキの生きのこりです。私たちもまた、ヒバクシャです」こう指摘し「全世界のヒバクシャよ、団結せよ」と呼びかけたのでした。

ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ。そしていま、フクシマ。「七七シンポ」の問いかけが迫ります。——これまでの核実験、核開発による被ばくをも視野にとらえて！。

*

（アめん下につづく）

第五福竜丸の 保存に尽された 深井平八郎さん逝去

第五福竜丸が夢の島に放置されたことが報じられた当初から船の保存に取り組み、江東区の「三羽ガラス・一姫」と称された四人のメンバーの一人、深井平八郎さんが五月九日に亡くなりました。77歳でした。



三羽ガラスの左から深井さん、若島さん、三井さん

深井さんは、夢の島に近い石川島播磨重工業に勤務し、職場の平和委員会で活動してい

ました。福竜丸の保存に取り組んだ江東区のメンバーによる対談（福竜丸だより二〇〇一年五月号）の中で深井さんは、「第五福竜丸のことが報道され、職場の仲間と見に行きました。辺りはドロコンコで草も木も無かったです。船は左舷が傾いて、海には廃船となった木造船の竜骨なども散らばり船の墓場のようにでした」と語っています。

深井さんをはじめ「三羽ガラス・一姫」の三井周さん（故人・東建従）、若島幸作さん（故人・区職員組合）、青木佳子さん（旧姓古泉、教員）などが中心となり、江東区の平和活動として「第五福竜丸の保存」に取り組みました。

深井さんは、保存運動を広げるバッジをデザインしたり手書きのポスターを作るなど活躍しました。門前仲町にある富岡八幡宮の縁日には、参道で募金集めをしました。

「第五福竜丸を残したことは、歴史の証拠を残すことで、核兵器を廃絶することができた後も人々の教訓として残すべきものです。船のことですから七つの海を渡って世界に広めてほしいですね」と対談

の最後に語っておられます。深井さんの言葉を心に刻みながら、第五福竜丸を次代に伝えていきたいと改めて思います。（安田和也／第五福竜丸平和協会事務局長）

*

青木佳子さん談 六八年の夏前だったとおもいますが、大



六分儀

いまもつづく ICBM実験

五月二二日、米国はカリフォルニア州バンデンバーグ空軍基地からミサイル実験基地が置かれているマーシャル諸島クワジエレン環礁に向けて、大陸間弾道ミサイルの発射実験を行いました。

この実験はミサイルの性能維持と向上のためのデータ収集が目的で、当初四月の予定でしたが、緊張状態が続いて

雨で船が沈みそうになり、登山用のテントを船のそばに立て深井さんや若島さんが見張りに泊まり込みました。とにかくコツコツと一人でも地道にやる、まじめで温厚でした。ビキニ事件の事を知らなければど国会図書館に通い、被災当時の新聞コピーを沢山集めてきたのも深井さんでした。

いた北朝鮮への刺激を避けるため延期されていたものと報じられています。

クワジエレン環礁はマーシャル諸島の中央に位置し、東京都とほぼ同じ大きさの世界最大の環礁を擁する環礁です。ドイツ、日本の占領を経て、四四年から今日まで環礁全域が米軍の基地とされています。四六年から五八年までは、ビキニ、エニウエトク環礁での核実験の後方支援基地として、その後はミサイル実験基地として、現在でも米国の核戦略を支える重要な役割を担っています。死の灰を浴びたロンゲラップ住民が最初に収容されたのもこの基地でした。

しかし、その影でクワジエ

服部学さんの言葉を「形見」として、残された人生を生き抜いていく、翠さんは先のお礼状にこう書かれています。

横須賀の米原子力空母母港化反対などデモに、街頭行動に、バザーの売店に、お二人の姿を見かけないことはありませんでした。学さんが寄り添うのか、翠さんが寄り添うのでしょうか。お二人の歩みが私を励まし続けます。（やまむら しげお／第五福竜丸平和協会顧問）

レン環礁の全住民は同環礁内のイバイ島というわずかの三平方キロの小さな島に強制移住させられ、劣悪な衛生環境下での生活を強いられています。一方で基地経済により首都マジユロに次ぐ近代的な島となっているイバイの人口密度は一平方キロあたりに二万二五〇〇人となり、超過密な「太平洋のスラム」と呼ばれてきました。

マーシャル諸島と米国は極めて緊密な関係にあります。が、その下で苦難を抱える人びとのこれからの注視して行きたいと思えます。（H）

来館者の感想文から

- ◇ボランティアのお話を聞いて第五福竜丸がなぜ展示されているのか、なぜ被ばくしてしまったのかという疑問も解け、放射線や核実験などの怖さについて学ぶことができました。僕は第五福竜丸を保存してよかったですと思います。この船にはたくさんの思い、かなしい思いが残っていると思ったからです。(三重・中学生)
- ◇小学生の頃に起こったこの事件で、放射能が毎日怖かった。人が作ったものは人がなくさなければと思います。(埼玉・60代)
- ◇特に心に残っているのは、核実験はやろうと思えばいつでもやれるということです。いつどこで起こるかわからないし、もし日本に落ちたら…と考えてしまいます。なので、私はこのことをより多くの人々に知ってもらいたいです。殺人をしたり、自殺をしたりしている人がいるけど、その人たちが死んだ今日は、亡くなった人たちが生きたかった明日なのだと思います、もっと生命を大切にしてほしいと思いました。(三重・中学生)
- ◇日本人全体がこの大事件をきちんと総括せず次第に忘れていったことが福島原発事故につながった。過ちは繰り返された。(東京・30代)
- ◇ロンゲラップとフクシマが重なった。(群馬・60代)
- ◇船のそばには千羽鶴がたくさんあり、紙にはいろんな人が平和を願っている言葉がつけられていました。人が人を傷つけていたことはとても悲しいことだと思いました。けど、人は前向きだと思いました。目をそむけないで、そのために何ができるか考えて行動するからです。すごいと思います。(三重・中学生)
- ◇これからは原子爆弾・水素爆弾を作

らない、放射能は出さないという法律を作ってもらいたいです。いまま原発の事故で放射能がばらまかれているので平和とはいえません。第五福竜丸の悲劇が二度とおこらないことを心から祈っています。(千葉・高校生)

- ◇世界から原爆も水爆もなくそうとちょっとよびかけてほしい。ぼくの力では声が届かないけど、このようなことがあってはいけないと思っています。平和に近づけるといいなと思っています。(岐阜・中学生)

◇核兵器の被害は広島と長崎だけだと思っていたので第五福竜丸のことを知っておどろきました。どれも忘れてはいけない日本の悲しいできごとです。東日本大震災のことも、ぜんぶ忘れないように一人の日本国民として引き継いでいかなければと思いました。(岐阜・中学生)

**平成 25 年度
定時評議員会開かる**

公益財団法人第五福竜丸平和協会の定時評議員会が5月19日に学士会館で開催され、平成24年度(2012年4月1日～2013年3月31日)決算報告に関して、理事会の決定及び監事の監査を経た財務諸表等(貸借対照表、正味財産増減計算書、同内訳表、財務諸表に対する注記、財産目標)について審議され、提案通り承認されました。

なお、評議員、理事、監事いずれも任期満了を迎えましたので次期の役員等を下記の通り選任致しました。

【評議員】

浅見清秀、岩佐幹三、岩垂弘、大石又七、桂川秀嗣、岸田正博、猿橋則之、榛葉文枝、高原孝生、日塔和彦の10氏を再任
(任期は2013年5月19日より2017

年5月定時評議員会の終了まで)。

【理事】

奥山修平、川口重雄、川崎昭一郎、坂野直子、山本義彦の5氏を再任
(任期は2013年5月19日から2015年5月定時評議員会の終了まで)。

【監事】

澤藤統一郎、浦野広明の2氏を再任
(任期は2013年5月19日から2017年5月定時評議員会終了まで)。

また、定時評議員会直後の理事会で川崎昭一郎氏が代表理事に再任されました。

* * *

**平成 24 年度
正味財産増減計算書**

単位(円)

経常収益(合計)	22,284,938
基本財産運用収益	752
事業活動収益	19,406,295
受取会費	1,809,000
受取寄付金	1,056,084
雑収益	12,807
経常費用(合計)	22,606,340
事業費(計)	20,806,567
公益目的事業 (展示保存、資料収集、普及広報)	18,706,667
その他の事業 (出版物・記念品頒布)	2,099,900
管理費	1,799,773
当期経常増減額	△321,402
当期在庫増減額	△74,886
当期一般正味財産増減額	△396,291
一般正味財産期首残高	20,706,328
一般正味財産期末高	20,310,040
正味財産期末残高	20,310,040

